３．１１ふたたび福島へ

横　倉　友　子

去る３月９日から１１日にかけて、昨年に引続き、「震災・原発事故の福島、参加応援の旅」に参加した。

この１年間も、福島第一原発事故の収束は、わたしたちの知る限りでは進んでいるようには見えない。むしろ実態は悲観的だ。福島第一原発の周囲の汚染水貯蔵のタンクから大量の汚染水が漏出したり、汚染水の海への流出等など。また、事故後３年間の時間経過から原発作業員の受ける線量が限界に近づき、現場に入る熟練の作業員が減るなど今後の原発内の事故処理の進行が危ぶまれる等など。福島第一原発の廃炉への作業を初め、今回の事故に関するすべての問題に対処すべく、原発そのものや原発周辺の科学に明るいすべての科学者の知恵を結集して、日本のためにも世界のためにもそして未来のためにも最小限の被害にとどめるよう努力をしてほしいと切に願うのは私ばかりではないはずだ。

世界的に見ても、原発の放射性物質の最終処分方法が未解決だというのに、ましてや、地震大国の日本で「第二の福島事故」が起こらない保障はない。

しかし、安倍自民党政権は「原発ゼロ」の旗を降ろし、原発中心のエネルギー政策をとると決め、さらに、首相自らほかの国々を回って原発のセールスまでする始末だ。

しかし、国民は現に「原発に頼らない生活」ができている。全国の原発が停止して２年にもなる。そして、全国各地で、「原発ゼロ」運動が巻き起こっている。

事故から１年後に市民の間から起こった「毎週金曜日夜の首相官邸前の原発ゼロ運動」がこの５月２日金曜日で１００回目を迎えた。ここ札幌でも「金曜日夜の道庁前行動」ももうすぐ１００回になる。

原発事故から３年。福島の人たちは元気で過ごしているだろうか。１年前に見た風景は変わっているだろうか。ツアーにそんな思いで参加した。

３月９日朝、私たちはまだ雪深い北海道千歳を後にして仙台空港に降り立った。

１日目の午後は、県庁所在地の福島市に着いた私たちは、東京や関西からの「福島応援のバスツアー」の参加者と合流。市内の音楽堂で、私たちツアー参

加者は、翻訳家の池田香代子さんと小学生の子がいる若いご夫婦の３人の座談会を聞いた。特に、福島の子供たちの健康や生活について語られた。その中で、壇上の「お母さん」が「福島の人間であることを強く意識するせいか、『私たちのことはそっとしておいて欲しい』という思いにかられることがある」と話した言葉が忘れられなく、どう読み解くべきかをずっと考え続けている。

また、この日、北海道からの福島ツアー一行のバスの中で、参加者の簡単な自己紹介のあと、運転手さんとガイドさんから、地元福島での経験の一端を聞くことができた。私たちの無理なお願いに応え短時間だが誠実に話してくれた。お二人からは、３．１１の地震当日のこと、さらに事故のあった日以降、特に子供を思う親の心情を話してくれた。事故後３年になる昨今、放射能の線量の多寡で立入り禁止区域とか帰宅困難区域など制限区域の段階がいくつもあり、段階ごとに補償額に差があるため、例えば数m離れた近所であっても何十万円も差が出て、その結果、近隣同士の仲がぎくしゃくして来たとの話もあるなど人間関係にも影響することも知った。

３月１０日（２日目）は、県の中ほどの「中通り」の福島市から県の海側の区域の「浜通り」に向かって「ツアー」が進む。

途中、飯舘村に立寄る。地元の人から、飯舘村は現在も、夜間は原則として村外に出なくてはならない状況は続いており、夜間の制限が解けたとしても、若い人たちほど帰村を望まない傾向にあると報告された。村そのものの存亡が問われているのだ。昨年のツアーでも紹介された老人ホームには、家族が引き取るなどで退院者もあったが、多くの方々が未だ入院しているとのこと。放射能の問題がなければ、天気の日には車いすで戸外を散歩できただろうと思いながら、物音ひとつ聞こえて来ないホームの建物をじっと見つめていた。

飯舘村の人たちの避難先は、西隣の川内村の仮設住宅にあった。飯舘村の人たちは幸いなことに一つの「団地」として住んでいた。仮設の中心に「共同コミュニティセンター」が置かれ、そこには村の職員も配置され、特に年老いた方々にとっては、日中、安心して過ごせる空間のようだ。昔ながらの村の仲間とおしゃべりもできるし、共同浴場でゆったりとお湯に入ることも。また、演歌歌手の慰問などもあり、楽しく暮らしていますと、私たちを前に元気にお話ししてくれた女性二人（７０代だろうか)。何棟も並んだ仮設住宅の団地を外から見たが、テレビで観たよりも屋根も低く、内部の広さは相当狭いと想像できるほど。センターで先ほどの老婦人が語った「仮設は（数軒の）長屋になっているので、隣の家とは薄いベニヤ板１枚だからどんなに静かにしても音が聞こえる。土台がつながっているから一方の端の家で床をドンドンとすると、反対の端の家にも伝わる。だから昼間はセンターに来るようになった。」との話を思

い出した。
　その後、私たちのバスは、太平洋を左手に見て「浜通り」を南下し、南相馬市と浪江町との境にある「希望の牧場」に向かった。
　昨年も立ち寄った牧場だが、今回は牧場主の吉沢さんが自らマイクを持って牧場の現状を話してくれた。
　３年前、事故後間もなく、政府が、福島の牛飼いの農家に対し「殺処分」を命じたのに対し、間もなく農家の若い経営者が抗議の自殺をしたニュースを聞いて、私もショックを受けたのを覚えている。
　吉沢さんは、福島第一原発に近いこの牧場で、今後、牛を飼うことは確かに困難だが、現在生きている牛たちが生命を全うするまで見届けたいとの思いで、牛たちを飼い続ける思いを述べ、そして、この牛たちに『福島第一原発の生き証人』になってもらうのだと語った。そして、吉沢さんのもとには牛たちの世話をするボランティアの青年たちや獣医師をはじめ多くの人たちの支援の輪ができていると。また、吉沢さんに共感する、県内の肉牛牧場経営者が増えていて、吉沢さんのように「生き証人」として飼い続けていると。
　牛たちは、放射能にまみれたその牧場の草を食べているが、それでも不足気味なので、全国各地から草ロールを送ってもらっているとのこと。費用を最小限に抑えているが、牧場経営による儲けはないため、全国の方々に訴えてカンパを訴えているとも。

　３月１１日（３日目・最終日）は、前夜宿泊の「浜通り」の「最北の市」の「相馬市」の松川浦の宿から、前日も走った浜通りを南下して、相馬市の農民連の直売所「野馬土」（「ノマド」と読みます。）に立寄った。ここでは、福島の地元の農産物は、逐一線量を計って基準値以下の品物を売っていること、むしろ、他の地域の物よりも線量がずっと低いものもあり、線量の計測を必ず行うので、「野馬土」で買う農産物は安心して食べられると話してくれた。ここで売る「米」も必ず線量計を通すので安心だとのこと。
　ただ、ここの線量計は数千万円もしたが、行政の援助もあって高性能の線量計を備えることができたとのこと。線量計を備えた販売方式が広まると、福島の農産物の「風評被害」がだいぶ減るのではないかと思う。
　この日は３月１１日。震災のあった日から丸３年。午後、最後にバスは慰霊祭が行われる南相馬市の小高区の会場へ向かった。
　慰霊祭には黒い喪服姿の人たちも多く、身内や知合いの人を失ったのだろうと思いながら、式場の様子を写す「会場」で参列した。ただ、仙台に向かう時間の都合で、式の途中の「黙とう」を終えてすぐに式場を後にした。

最後に、私はまた、福島の人たちからも、同行の人たちからも、大いに元気をいただきました。ありがとうございました。